HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	女子サッカー選手の労働と生活に関する研究 ： 不安定な競技実践形態とアスリート・アイデンティティをめぐるエスノグラフィー［全文の要約］
Author(s)	申, 恩真
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14414号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81784
Type	doctoral thesis
File Information	SHIN_Eunjin_summary.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　**氏名：申　恩真**

学位論文題名

女子サッカー選手の労働と生活に関する研究
―不安定な競技実践形態とアスリート・アイデンティティをめぐるエスノグラフィー―

本論文は、日本における女子サッカーの文脈を踏まえつつ、選手の競技活動とそれを可能にする労働と生活はどのように相互に関わりながら営まれているかを、フィールドワークによって得られた選手当事者の視点から描き出したものである。

第 1 章では、女子サッカーの脆弱な基盤は、競技自体の固有性に由来することをスポーツとジェンダー研究の観点から明らかにした。そもそもサッカーは「男らしいスポーツ」として発展し、女性には「男らしく」戦うことが求められた。その結果、女性は「二流の選手」として位置づけられてきた。

第 2 章では、女子サッカーはなぜ脆弱な競技環境に置かれているのか、リーグの変遷や現状を確認することで把握した。リーグで活動する女子選手の身体は、男性の身体より劣っているものとして、また男性による性的対象として見なされてきた。こうして女子サッカーは、競技面と財政面で脆弱な基盤しか持ち得ない状況に置かれていることが明らかになった。

第 3 章では、加盟チームの実態を明らかにした。そこでは、どのような財政的な困難が生じているか、それが選手たちの競技活動と労働・生活をいかに不安定にさせるかを解明した。その結果、チームでは、リーグ拡張とともにチーム間の競争も激しくなることに伴い、チーム自体を存続させ、また競技力を向上させるための戦略として、同じチーム内にプロ選手とアマチュア選手を混在させる形で、チームの選手を構成せざるを得ず、こうして選手の競技実践形態は複数化して行ったことが明らかになった。

第 4 章では、個々の女子サッカーチームが、実際にどのように運営され、選手の競技実践形態はどのようにあらわれているかを、フィールド先である K チームに即して確認した。地域密着型の運営を標榜する K チームにおいて、選手たちはチームの活動だけでなく、それ以外の労働と生活においても、チームの秩序や規律に即して振る舞うことが求められていた。また、同じチーム内に「プロ選手」、「支援企業の社員選手」、「一般企業の社員選手」、「学生選手」という、少なくとも四つの競技実践形態が存在するがゆえに、この実態が、チーム内で緊張感を孕んだ不安定要素になっていることがわかった。

第 5 章では、K チームと地域社会の関係性を検討した。地域社会から支援されるものとして位置づく K チームの選手たちは、自らを、地域を代表する社会的責任を持つ集団として意味づけながら、チームと地域社会との友好的な関係のために尽力しなければならない状況にあった。しかし、このような関係性が一方では選手たちの生活を規定する場合もあった。

第 6 章では、同じチーム内にいる選手の競技実践形態が異なる中で、選手たちはどのような経験をしているかについて検討した。その結果、K チーム内では、選手の属性を問わず「セルフ・デボーション（self-devotion）」をすることで「本当の選手」になることが理想的であり、これは女子サッカー選手が獲得すべきアイデンティティと見なされていた。選手たちは、同一なサッカー選手として競争をしながら、他方で「認識上のステータス」が「契約上のステータス」より低く位置づいている逆説的な状況の中で競技活動を行なっている点が明らかになった。

第 7 章では、プロ選手の労働環境について検討した。同じチーム内に競技実践形態が異なる選手がいる場合、プロ選手は、アマチュア選手からの評価の目に晒されているゆえに、月経の痛みを同じ女性であるチームメイトにも隠してでも、自分の「認識上のステータス」を維持しようとすることが見られた。

第 8 章では、支援企業の社員選手の労働環境について描出した。支援企業とそこに雇用された選手の関係には、支援する側／支援される者といった力関係が胚胎しているため、選手が支援企業の要請に従うことは暗黙の前提になっていた。なかでも、支援の質的問題を象徴的に示していたのが「立ち仕事」であった。彼女らは、「サッカーのための労働」が「サッカーから疎外される不安定な労働」へと変化していく矛盾を感じながら競技を実践していることが明らかになった。

第 9 章では、ここまで本論文の中で見えてきたものをもとに、女子サッカー選手の労働と生活に大きく関与する 4 つのジェンダー構造を整理した。その結果、女子サッカー選手たちは、競技種目上のジェンダー構造（近代スポーツにおけるジェンダー構造）、サッカーチームのジェンダー構造、サッカーにかかわる組織・機関のジェンダー構造、職場（企業）のジェンダー構造、これらの重なりの中に位置づけられているのがわかった。こうした現状が、女子サッカー選手たちのジェンダーに関する自覚や問題化への回路を困難にさせていると言わざるを得ない。

終章では、女子サッカー選手の労働と生活を踏まえ、本論文が見出した新たな知見を示した。競技活動を最優先するアスリートにとって、経済的基盤の確保（労働）は、競技環境を最大限保障できるかどうかが最も大事な問題となっていた。財政的な基盤を持ち得ない競技に携わるアスリートたちは、そうでないアスリートよりも、競技種目自体とそれに関連する組織（リーグ当局、チーム、選手間など）とのやりくりによって、不安定な競技活動を行わざるを得ない現実を指摘できる。ここに重層的なジェンダー構造を重ねてみると、トップではないアスリートにのしかかる不安定性に加えて、女性であるということは、ジェンダー秩序が色濃く浸透しているスポーツにおいて、女性アスリートたちにさらなる不安定化を強いる要因となっている。一方で、女子サッカーを通して見えたスポーツやアスリートの可能性として、一つ目は、セカンドキャリアへの切り替えをスムーズに移行できる「学び」の機能を持つということ、二つ目は、次世代、特に女の子たちのロールモデルになりうるなどスポーツにおけるジェンダー秩序を揺るがす可能性があることを言える。